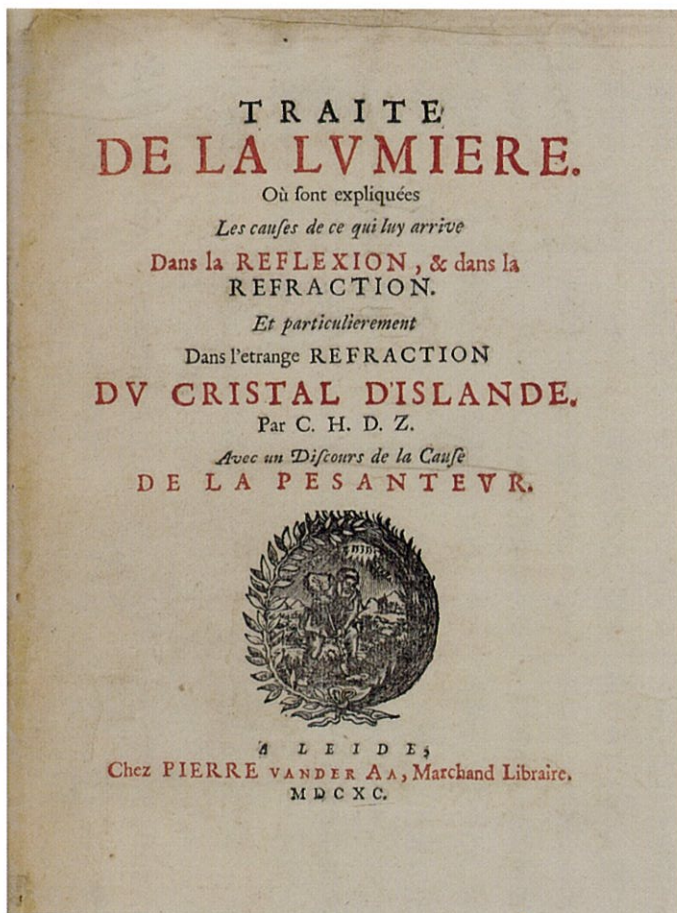


やまとの名品 天理図書館



ひかり ろんこう
光についての論考

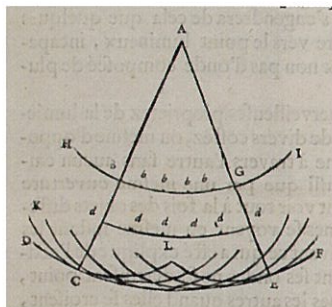
クリスティアン・ホイヘンス著
ライデン 1690年刊
縦27cm 横23cm

十七世紀オランダの科学者、天文学者クリスティアン・ホイヘンス（一六二九～一六九五）の名著で、光とは何かを論じたものです。フランス語で書かれています。

光とは何かという疑問には、何千年という研究史があります。十七世紀後半に、イギリスの科学者アイザック・ニュートンは、光は粒子であるという、いわゆる「粒子説」を発表しました。それに対して、ホイヘンスは、この著で、光は波動であるという説を唱えました。挿絵は、彼の「波動説」が図で表されたものです。万有引力を発見したニュートンの科学者としての名声に

押されて、ホイヘンスの波動説は陰に隠れたものになっていきましたが、十九世紀になって、改めて評価を受け、両説の論争が続きました。

ホイヘンスは、波動説を唱える際、宇宙はエーテルという物質で満たされていて、光は、このエーテルの振動だと述べました。エーテルが本当に存在するか否かも論争の種となっていました。二十世紀の初め、物理学者アルバート・アインシュタインの相対性理論によって、宇宙にエーテルというものはない



ということが明らかになりました。アインシュタインは、新・粒子説とも言える「光子（フォトン）説」を提唱し、現代物理学では、光は粒子と波動の両方の性質を持つと考えられています。

ホイヘンスは、この他に、望遠鏡を自作して、天体を観察し、土星の輪や衛星を発見しました。オリオン大星雲を発見したのも彼です。また、振り子時計やぜんまい時計を製作して、機械時計の発達に大きく貢献しました。

（天理図書館 瀬川清人）

天理図書館のお知らせ Tel : 0743 - 63 - 9200 <http://www.tcl.gr.jp/>

◆平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）

○3月の休館日：20日・27日～31日

（本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）